

もくじ

文化庁に注文する

演劇を正課に……………浅利慶太……4
 ——文部省教育関係者に望む——

「日本の歌、雑感……………藤田まさと……6

百万都市の合唱組曲……………栗原一登……7
 ——北九州市の試み——

祭りの映画作りの楽しさ難しさ……………星野 紘……8
 ——祝島の神舞神事を撮って思う——

秘仏開扉……………真保 亨……10

我が町、我が村の文化行政
 滋賀の「湖と文化の懇話会」 滋賀県教育委員会 ……11

文化庁ニュース

日本芸術院賞・恩賜賞が決まる……………12

優秀映画製作奨励金交付作品決まる……………12

昭和51年使用教科書等掲載補償金額決まる……………13

著作権審議会第20回総会開催……………13

昭和51年度文化財補助金交付決まる（最終回）……………13

昭和51年度日本語教育研究協議会開催さる……………14

鑑査官、計量行政審議会専門委員に就任……………15

長野県及び長野県蚕糸業審議会
 文化庁・国語審議会等へ要望書……………15

文部省社会教育局のラジオ番組に文化庁次長ら出演…15

国立演芸資料館の愛称について……………15

東京国立近代美術館で「浜田庄司展」……………15

文化庁買上優秀美術作品……………16

WIPO記念切手発売さる……………16

文化庁の人事異動、柳川次長、文部省体育局長へ……17

昭和52年度「美をもとめて」放送計画……………17

文化行政長期総合計画について①……………18

法人紹介

放送文化基金……………22

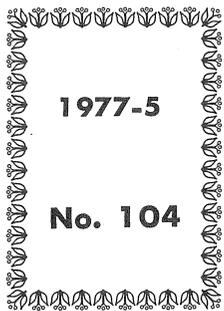
〔紹介〕

英国におけるオペラ養成の現状とその変革……………水島和夫……24

昭和52年度文化庁行事予定一覧……………28

文化財保護法教室(10)
 重要無形文化財の指定とその保護(1)……………30

国立劇場ニュース……………31



1977-5

No. 104

表紙 斑猫図 竹内栖鳳筆
解説は17ページ参照

題字デザイン・桑山弥三郎

* 文化庁に注文する *

演劇を正課に

文部省教育関係者に望む



浅利慶太

演出家
文化行政長期懇話会委員

一 美術と音楽

先日、ある本で、日本の教育制度の中に、音楽と美術が正課としてとり入れられてから来年でほぼ百年になるということが書いてあるのを読んだ。この百年間のつみ上げは、音楽と美術の振興のために測り知れないプラスになっている。

音楽に親しむ機会が多いこと、音感教育を国民がうけたことが、日本人の音楽性を高水準にさせた。同時にクラシックの歌手から流行歌の歌手まで、いろいろな歌手を生み、レコード産業を発達させ、弱電産業をはじめとして電気産業、機械工業……と、今や日本の社会構造に深くかかっている。

美術にも同じことが言える。絵を買うとか、描くとかだけでなく、日本人のデザインに対する感覚・美意識を育ててきた。

ただ単に、美術や音楽が普及したということ以上に、社会に大きな影響を与えてきたのである。

二 演劇

さて、私の本職の演劇であるが、日本の教育制度

の中で、演劇は不当に扱われてきたと思う。端的に言えば、演劇というものはアカか河原乞食がやるものだという認識があった。教育界ばかりでなく社会一般にもこの認識があった。

こんな話がある。

明治維新により万民平等ということになった時、ある歌舞伎の名優が家に門をはじめて作った。が、すぐ引き倒されてしまったという。役者が門を作るのは身分不相応で生意気だということである。

演劇は、まともな人間が観たり、やるものでないという社会のそういう差別意識や因襲がつづき、それに加えて大正期の演劇運動が相当左傾していたこと、また新劇団の大半が専門用語でいえば社会主義リアリズムの方法論でやってきたこともあって、戦後になっても教育者たちは、演劇にアレルギーを示してきただけだ。

私たちは子供のために、この十四年、日生劇場でミュージカルをみせてきている。この仕事は、昨年東京都で百万人の観客数に達したし、全国何百万人に無料で見せつけてきた。心ある人、常識ある人は、「いい仕事をやってている」と評価して下さるが、時によ

って、教育委員会や学校長の人々の中に、そんなものは絶対に見せられないという頑迷な態度に見ることがある。

余談だが、私が文部省や文化庁の審議会委員になったり、芸術祭に参加したりするのは、そういうアレルギーを排除するためである。新劇の人間ということになると、各地の小中学校の校長先生たちはフランクにあつかってくれることが余りない。

だが文部省に頼まれて委員をやっていることが解るとずいぶん態度が変わる。そこから、はじめてこの人の話は聞くべきだ、というようになる。つまり人権が与えられる。

三 演劇は教育と無縁か

ところで、演劇というものが教育と本来的に無縁であるかという点と全く逆で、一番先に教育制度の中にとり込まれなくてはならないものだと思う。

先進国、特にアメリカなどでは演劇コースを置いていない学校はむしろ稀である。どの段階の学校にもドラマコースがある。

では、演劇を何故重視しているのか。それは二つの理由からである。

四 個性を損わずに参加、交流

まず、デモクラシーの社会では、コミュニケーションに対する感覚が発達していなければ、社会そのものが維持できない。ところが子供達それぞれ個性の故に、一人一人がカラの中にとじこまる習性を持っている。

戦後の教育の一つ——いまでもあると思うが——ホームルームは、そういう子供を解決しようとする試みであったのであろう。子供に発言させる機会を作ってコミュニケーションの訓練をする。しかし、ささか機械的につくられたこういうやり方は果たして

思っている。

美術と工芸と音楽だけが芸術ではない。演劇・舞踊は人類が始まった時から歴史をもっている。

今の文部省は、事実上教育省であり、文部省の横に小さな文化庁が附いているのはまったくおかしい。教育とは、大きな文化の一つであって、今世紀の文化に対して現代人は何をなすべきかといった基本的な文化政策がまず考えられ、その中で現代の教育はどのようなべきかが問われてくるのでなければならぬ。

ところが、教育省が巨大で、申訳ばかりに文化庁がついているのが現状である。これは後進国型である。大久保利通が明治政府を構想した時、豊かな人材をつくり出すため、膨大な教育投資が行われた。それはそれでよい政策だった。しかし相当な時間が過ぎた今、もうそろそろ後進国型から脱し、先進国型とはいわぬが、標準型になってもらわなければならない。

それには、文化省が出来て、教育省と対等に話が出来ねばならない。教育の諸問題を文化の視点から考えていかねばならないと思う。

文化省問題は、行政機構の縮小という単純なテーマでは片づけられない。

私もチーバガバメント論には賛成だが文化に関するかぎり、今後まだ相応の国家投資が必要だと思つた。演劇のことをとりあげたが、演劇以外にも見直しなればならぬ文化はたくさんあると思う。

教育を文化の視点から見直し、演劇に正当な位置づけをしてもらいたい。まず、演劇をとりあげ、選択制の科目にすることからはじめてはどうだろうか。

(談話筆記)

て効果を持つのだろうか。ただ単に発言させるだけでなく、そのグループに芝居をやらせてはどうだろうか。

芝居では、機械じりりの好きな子は音響をやる、絵の好きな子は舞台装置をやる、おしゃれな子は衣装をやる。顯示欲のある子は役者をやる。理屈っぽい子は演出をやる。世話ずきな子は制作をやる。いろんな形で、それぞれ個性を生かして一つのものを創り上げていく。観客に見せること、それ自体が社会的行動である。おのおの隠れた能力を発揮しあひなが共通の目標に向かって話し合っていく。

だから芝居が一本出来上った時には、自分達の個性を損わずに大いに交流し合うことが出来る。これが一番大きなことで、このため各国では子供達に芝居をさせる。

今の教育制度で、一番欠けている部分はここではないだろうか。

五 語り言葉の重視

もう一つの理由は、演劇が語り言葉の美しさを重視するからだ。

語り言葉における美しさ、大切さに対する自覚というものが教育界には少しく欠けている。

読み方、書き方、習字はある。しかし、言語というのは、読み書くことも大切であるが、現実の生活で使われるのは殆んどが語り言葉である。語り言葉について練達していないと、あるいは訓練をうけていないとお互いの意思や個性の確認が出来ない。日本の教育制度はそこを素通りしているのだ。

文盲追放のためであれば読み書き教育だけでよかつたが、もうこの時代はすぎ、人間交流を深め、人間形成のための教育の時代になっている。

これからは語り言葉の重要さを徹底的に認識していかなければならない。教育としてはこの方が主流にな

らねばならない。それにはドラマが最も適当である。

私達の世界では、フランス人が羨しいとよくいう。フランスでは民衆が美しいフランス語を愛している。たとえば、パリの八百屋でラシーヌの悪口をいつたら、奥さんから大根でなぐられたという冗談があるが、日本で近松門左衛門の悪口をいつてもなぐられるという話は聞かない。

フランスでは、子供達もとても美しいフランス語を暗唱する、ラシーヌは不滅の名作をいくつもつく

ちなみに、ラシーヌは不滅の名作をいくつもつくつたが、生涯三千語しか使わなかったという。三千語しか使わずにいて、全部のフレーズが頭韻と脚韻をふみながら、十二のシラブルにわかれている。まさに天才である。だから彼の文体にはフランス語のエッセンスがある。

そこに語られているのは男女の愛である。

しかし、フランスでは、内容はともあれ完璧な美しいフランス語を自覚させる、美しい言葉を自覚させることをより重大に考えるのだらう。言葉は国家なりという愛情と自覚である。

六 全ての演劇人の願い

さて、演劇が教育の制度の中で、正当な評価を得なければならぬということ、美しい語り言葉のために演劇を振興させなければならぬということについて、演劇人はどう考えようか。

演劇人の中にはいろんな考え方の人がいて、極端なマルキスト、中道志向の人、そして老若、新旧とろんな考え方の人がいるのだが、全演劇人はこの二点を願望しているといつてよい。

七 文化から教育を見直せ

もうそろそろ演劇を学校の正課にとり入れることについて、根本的に取り組むべき時期にきていると

編集後記

○演劇を正課に、との浅利氏の提言、文部省、教育委員会、学校関係者に特に読んでもらいたい。

文明懇でも梅原猛氏が、今、実社会に芸術が必要であることを唱えられ、梅棹忠夫氏も「学校教育の中に思いついて相当の芸能を導入せよ」と提案している。(歴史と文明の探求・下・七八・一八〇頁)。

○明治一代女、大利根月夜、岸壁の母、傷だらけの人生……と巷で庶民が口ずさむったの作詞家、藤田正人氏、「文化」の輸出というのが持論だ。

○日頃、文化庁がお世話になり、御指導をいただいている栗原一登さん、北九州の八幡とは初耳、編集子是小倉なので嬉しくなった。氏のお嬢さんが栗原小巻さんだ。芸能界には福岡県をはじめ九州出身者が多い気がする。九州人は、芸能、芸術向きか。(大)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課
TEL〇三三六八二二四一(代表)

「文化庁月報」 五月号

(通巻第一〇四号)

昭和52年5月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 きょうせい

本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号

営業所 千代田区新富区西五軒町52番地

電話(〇三)二六八二二四(代表)

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 (株)行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)
年間購読料 一、八〇〇円